

令和4年度 アート選奨K基金事業

実施概要 磯田憲一氏からの指定寄附を基に、本道の文化の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人または団体を対象にアート選奨K基金賞を贈呈した。

<p>内 容</p>	<p>令和4年度アート選奨K基金賞 受賞者</p> <table border="1" data-bbox="356 536 1980 1305"> <tr> <td data-bbox="356 536 510 616">氏 名</td> <td data-bbox="510 536 1980 616"> <small>かたばみ</small>                      方波見 康雄（医師）                 </td> </tr> <tr> <td data-bbox="356 616 510 671">在 住 地</td> <td data-bbox="510 616 1980 671">奈井江町</td> </tr> <tr> <td data-bbox="356 671 510 1305">略 歴</td> <td data-bbox="510 671 1980 1305">                     1926年奈井江町生まれ。                      1945年、旧制岩見沢中（現岩見沢東高）を卒業。北海道帝国大予科医類に入学。                      1952年、北大医学部を卒業。大学でがん免疫抗体の研究に、さらに内科の臨床に従事する。                      1959年、北大から奈井江町に戻り、父莊衛さん（1979年死去）が開業した方波見医院を継ぐ。以来、60年以上にわたり、地域の人々の“生老病死”に、同じ地域に暮らす一人の人間として寄り添い続ける。                      1994年、地域で老いを共にみる仕組みを作ろうと、町立国保病院に入院した患者を、かかりつけ医が診療できる「開放型共同利用」を町長に提案し、地域包括ケアシステムを、いち早く実現。緩和ケア、ターミナルケア（終末期医療）、死の臨床など、専門的な用語や概念が国内で普及する前に診療所で実践した。                      専門は、内科学、老年医学、生命倫理。                      2006年、北海道新聞生活面にエッセー「いのちのメッセージ」を書き始める。                      2011年、北海道大学大学院医学研究科特別賞受賞。                      2017年、第71回北海道新聞文化賞受賞。                      2021年、後藤新平賞受賞。                      ◎主な著書                      いのちのメッセージ「まちのお医者さん」が見つめる生老病死（北海道新聞社 2010年）                      生老病死を支えるー地域ケアの新しい試みー（岩波書店 2006年）                 </td> </tr> </table>	氏 名	<small>かたばみ</small> 方波見 康雄（医師）	在 住 地	奈井江町	略 歴	1926年奈井江町生まれ。 1945年、旧制岩見沢中（現岩見沢東高）を卒業。北海道帝国大予科医類に入学。 1952年、北大医学部を卒業。大学でがん免疫抗体の研究に、さらに内科の臨床に従事する。 1959年、北大から奈井江町に戻り、父莊衛さん（1979年死去）が開業した方波見医院を継ぐ。以来、60年以上にわたり、地域の人々の“生老病死”に、同じ地域に暮らす一人の人間として寄り添い続ける。 1994年、地域で老いを共にみる仕組みを作ろうと、町立国保病院に入院した患者を、かかりつけ医が診療できる「開放型共同利用」を町長に提案し、地域包括ケアシステムを、いち早く実現。緩和ケア、ターミナルケア（終末期医療）、死の臨床など、専門的な用語や概念が国内で普及する前に診療所で実践した。 専門は、内科学、老年医学、生命倫理。 2006年、北海道新聞生活面にエッセー「いのちのメッセージ」を書き始める。 2011年、北海道大学大学院医学研究科特別賞受賞。 2017年、第71回北海道新聞文化賞受賞。 2021年、後藤新平賞受賞。 ◎主な著書 いのちのメッセージ「まちのお医者さん」が見つめる生老病死（北海道新聞社 2010年） 生老病死を支えるー地域ケアの新しい試みー（岩波書店 2006年）
氏 名	<small>かたばみ</small> 方波見 康雄（医師）						
在 住 地	奈井江町						
略 歴	1926年奈井江町生まれ。 1945年、旧制岩見沢中（現岩見沢東高）を卒業。北海道帝国大予科医類に入学。 1952年、北大医学部を卒業。大学でがん免疫抗体の研究に、さらに内科の臨床に従事する。 1959年、北大から奈井江町に戻り、父莊衛さん（1979年死去）が開業した方波見医院を継ぐ。以来、60年以上にわたり、地域の人々の“生老病死”に、同じ地域に暮らす一人の人間として寄り添い続ける。 1994年、地域で老いを共にみる仕組みを作ろうと、町立国保病院に入院した患者を、かかりつけ医が診療できる「開放型共同利用」を町長に提案し、地域包括ケアシステムを、いち早く実現。緩和ケア、ターミナルケア（終末期医療）、死の臨床など、専門的な用語や概念が国内で普及する前に診療所で実践した。 専門は、内科学、老年医学、生命倫理。 2006年、北海道新聞生活面にエッセー「いのちのメッセージ」を書き始める。 2011年、北海道大学大学院医学研究科特別賞受賞。 2017年、第71回北海道新聞文化賞受賞。 2021年、後藤新平賞受賞。 ◎主な著書 いのちのメッセージ「まちのお医者さん」が見つめる生老病死（北海道新聞社 2010年） 生老病死を支えるー地域ケアの新しい試みー（岩波書店 2006年）						

内 容	氏 名	齋藤 歩（公益財団法人北海道演劇財団理事長、札幌座チーフディレクター）
	在 住 地	札幌市
	略 歴	<p>1964年釧路市生まれ。  北大演劇研究会を経て、1987年に札幌ロマンチカシアター鮎鮎(ほうぼう)舎設立。  1996年、北海道演劇財団設立に伴いTPS契約アーティストに就任。  2000年より（株）ノックアウト所属俳優として、東京での俳優・演出家の仕事を開始する一方、札幌でも2001年からTPSチーフディレクターとして「亀、もしくは…。」「冬のバイエル」「西線11条のアリア」「春のノクターン」「瀕死の王さま」など多数の演劇作品を発表。  2016年4月より、札幌に移住し、北海道演劇財団の常務理事・芸術監督に就任。  2020年4月より、同財団の理事長に就任。  札幌を拠点にした演劇創造、東京を拠点にした映画、テレビ、舞台出演など活動は多岐にわたる。</p> <p>北海道戯曲賞の選考委員（2014年度～2021年度）  北海道文化審議会委員（2016年度～）  札幌演劇シーズンプログラムディレクター（2019年～）  演劇創造都市札幌プロジェクト副代表（2015年～）</p>